

# 英語照応現象の一考察

——“Deep and Surface Anaphora” 再考——

林 龍 次 郎

#### **A Note on Anaphora in English: "Deep and Surface Anaphora" Reconsidered ———**

In this paper I review the issue of "Deep and Surface Anaphora" in English, first noted by Hankamer and Sag (1976). I propose a classification of anaphora which is different from Hankamer and Sag's. The heart of my new classification is the distinction between anaphora of concrete things and that of abstract concepts. I investigate the use of the pronoun it, arguing that personal pronouns in English are essentially elements that refer to abstract concepts rather than concrete entities. It is then claimed that "pragmatic definiteness" controls the use of the pronoun it. I also examine the distribution of do substitution forms, namely do it, do this/that, and do so.

## 1 はじめに

本論では、Hankamer and Sag (1976) 以来知られている深層照応と表層照応の問題を中心に、英語の代用表現について考える。

Hankamer and Sag は照応現象を深層照応 (Deep Anaphora) と表層照応 (Surface Anaphora) の2つに分類した。彼らの主張によると、照応には言語的文脈に明示的に現われた先行詞を必ず必要とするものと、非言語的文脈にも先行詞をとりうるものがある。前者は表層照応であり、統語的制御 (syntactic control) をされるが語用論的制御 (pragmatic control) は不可能である<sup>1)</sup>。後者は深層照応であり、語用論的に制御される。

Williams (1977) は Hankamer and Sag を批判した。彼は深層照応と表層照応の区別は不要で、語用論的制御可能性の差は代用形が NP 節点に支配されているかどうかによると主張している。He, one, it, および John's  $\phi$  等の NP に支配された代用形は語用論的制御が可能で、削除された VP や so, such 等 NP に支配されない代用形は語用論的制御が不可能であると Williams は述べている。

私見では Hankamer and Sag にも Williams にも不備な点、より詳細な観察を要する点がある。まず、Hankamer and Sag の深層照応および語用論的制御可能性の概念はややあいまいである。安井・中村 (1984) は照応現象 (彼らの用語では「同一物指示 (reference)」) を「外界照応」と「テキスト内照応」の2つに大別している。本論ではこの分類を受け入れたうえで、照応するものが具体物であるか抽象概念であるかによって先の2つをさらに分類する。このように照応を詳細に観察・分類することにより、語用論的制御可能性の概念は Hankamer and Sag が考えるよりももう少し複雑であることがわかる。Williams の、NP に直接支配された代用形は語用論的制

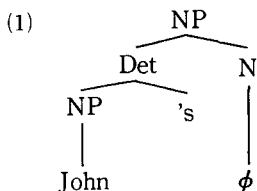
御が可能で、そうでない代用形は不可能であるという仮説も簡略化のしすぎである。照応現象は、NP の存在・非存在といった統語論上の要因だけでは説明しきれず、意味や言語外世界の要因に注目する必要がある。

## 2 照応の分類再考

この節では、Hankamer and Sag (1976) および Williams (1977) の、語用論的制御の可能性についての仮説を検討していく。

まず Williams の説をさきに見ることにする。彼の主張で、he, she, it, one などの NP に直接支配された代用形が語用論的制御を許すというのはよいとして、John's  $\phi$  などともこれと同様に考えている点は問題がある。

Williams は、John's  $\phi$  において N の節点が削除されたと考えているようだが、これは N の削除ではなく、(1)の図のように語彙的要素 (lexical item, この場合おそらく one) がゼロ形態素で置換されたとみるべきである。つまり John's  $\phi$  の  $\phi$  は、NP 節点に直接支配されていない<sup>2)</sup>。



さらに、John's  $\phi$  を語用論的制御が可能な代用形とするなら、the last  $\phi$ , the first  $\phi$ , the second  $\phi$ , the same  $\phi$ , each  $\phi$ , any  $\phi$  (これらの  $\phi$  も one を置き換えたものだろう) などともこれに含まれると思われる。しかしこれらが語用論的制御を許すかどうかは事実の上で疑問がある。たとえば、何かが一列に並んでいるのを見ていきなり次のように言うことは不自然である。

(2) I like the first/last best.

先行文脈のない場合には the first/last のあとに one または普通の名詞が

現われなくてはならない。The same  $\phi$ , each  $\phi$ , any  $\phi$  などについても同様で、言語上の先行詞なしに用いることは難しい。すなわち語用論的制御を許さないのである。

さて、この節の最初で he, she, it, one などが語用論的制御を許すのはよいとしたが、実際はこの主張にも問題がある。少なくとも、人称代名詞 it が、語用論的制御の可能性について指示代名詞 this や that とは質的に異なることに注目しなければならない。Hankamer and Sag (1976, p. 392) は、次のような例をあげて do it が語用論的に制御可能であると述べている。(＃は意味論的・語用論的に許されないことを示す。)

(3) [Hankamer attempts to stuff a 9-inch ball through a 6-inch hoop]

Sag: It's not clear that you will be able to  $\left\{ \begin{array}{l} \text{do it.} \\ \# \phi. \end{array} \right.$

この例は、ゼロ照応形が語用論的制御不可能なのに対して、do it はそれができることを示している。この場合、'it' は「6 インチの輪に 9 インチのボールを押して通すこと」という概念化されたものを指す。確かに it は「(話し手と聞き手の共有する) 概念」を、たとえそれが言語上の先行詞として文脈に現われていなくても指示できる。これに対し、「概念」でなく具体的な「もの」の場合、言語上の先行詞なしに "It is my pen." などということは普通言えない。文脈の中にまだ出てきていない「もの」を指すときには this や that または the + 名詞を使うのはよいが人称代名詞を使うと不自然になる。もっとも 2 人の人がしばらくの間黙って机の上のペンを見つめていて、一方が思い出したように "It is my pen!" と言うようなことはありうる。しかしこの場合すでに「机の上にあるもの」という概念となって話し手と聞き手のあいだで共有されているから it で受けられるのである。少なくとも this や that のような直示的な (deictic) 用法は it にはない。

このように深層照応 (Deep Anaphora) の中にも 2 つのタイプを区別する必要があると考えられる。1 つは言語外世界の「事物」に基盤をおく表現

で、もう1つは言語表現の「意味」に基盤をおく表現である。これは、安井・中村(1984, p.226)も the same の用法に関して述べている。

(4) a. A : John thought it was impossible.

B : Yes, I thought the same.

b. We can trust Smith. I wish I could say the same of his partner.

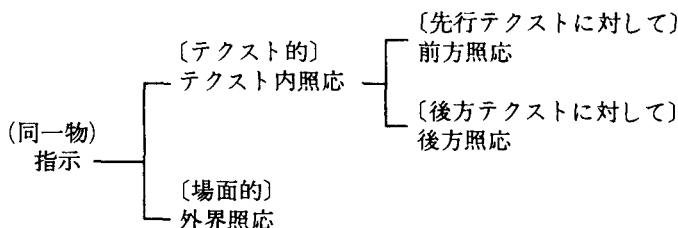
c. A : The old man fell on his way to church.

B : Yes, and I'm afraid he did the same last Sunday.

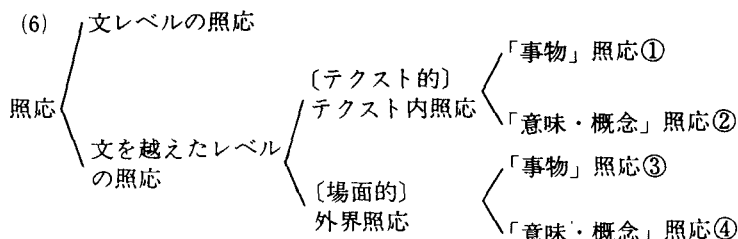
上のような、特に b, c のような the same と照応するのは現実の言語形式をもたない抽象レベルの概念である。a の場合は the same = it was impossible であり、文脈内の言語表現で一応言いかえができる。しかし b の the same は We can trust Smith で置き換えることはできない。あくまでも the same = 「(人)を信頼すること」という抽象レベルの概念であり、言語形式としては文脈内に現われていない。c も the same = 「教会に行く途中ころぶこと」であり、この概念はそのままの形では文脈に現われていない。

同様のことは the same のみならず it や他の照応表現についても言える。安井・中村(1984, pp.22-23)は次のような体系図を提案している。

(5)



ここでは前方・後方照応の問題は扱わないことにして、「事物(もの)」を照応するか、「意味・概念」を照応するかということを考慮に入れた体系を考えてみたい。ここで次のような体系図を提案する。



上の図における「文レベルの照応」は、純粋な統語論の原理（生成文法の束縛理論等）によって規制されるものであり、本論では対象としない。対象とするのは「文を越えたレベルの照応」で、これを上のように4つに分類した。

では、代名詞 *it* について上図の①-④のそれぞれに該当する例を示したい。

①は次のようなごく一般的な例である。

(7) A : Did you see Mary's picture ?

B : Yes, it was wonderful.

②の例は次のようなものである。

(8) a. A : Do you know that John got married ?

B : Yes, it is known to everyone.

b. A : John forgot his keys.

B : Mary did it, too.

c. A : Bill seems to have been scolded by his teacher again.

B : (i) Looks like it.

(ii) It's the same with me.

a の場合は *it*=*that John got married* でそのまま置き換えられ、文脈内に先行詞が言語形式として現われていると言えるが<sup>3)</sup>、注目すべきは b, c の2例である。b の *it* は「自分の鍵を忘れること」という抽象レベルの概念であり、文脈内には照応する形式がない<sup>4)</sup>。c (i) の *it* も「ビルがまた先生に叱られた(こと)」という「意味」を受けるものであり、これに相当

する形式は文脈内にはない。さらに c(ii) では *it* が受けるものは「(人が) また(自分の) 先生に叱られたこと」という意味に変わる。

③と④は、先行する文脈内に先行詞がない場合である。まず、④の例から示したい。

(9) a. Wait. I'll do it.

b. A: Now you have done it.

B: Done what?

A: Made me drop the matches. (安井・中村 1984, p. 191)

c. (= (3))

[Hankamer attempts to stuff a 9-inch ball through a 6-inch hoop]

Sag: It's not clear that you'll be able to do it.

これらの *it* はすでに述べたように、話し手と聞き手が共有する(と話し手が判断する)概念を指示している。

では、③はどういう場合か。前に述べたように、いきなり机の上のペンを指して “It is my pen.” とは普通言えない。

要するに *it* は①②④としては使えるが③として使うのは不自然である。これは英語の他の人称代名詞 (*he, she, they*) にも言えることであろう。安井・中村 (1984, p. 22) が述べているように、人称代名詞はどちらかといえばテキスト内の他の要素を照応する用法が無標であり、テキスト外照応は有標であると考えられる。特にテキスト外の「事物」と照応すること(③)は難しい。しかし外界でも抽象レベルの「意味・概念」になると(④) *it* と照応しやすくなる。おそらく人称代名詞は本来、話し手と聞き手の間で「概念」として共有されたものを受ける代用形なのであろう。①が可能なのは、たとえ「事物」であってもテキスト内のものなら外界の事物とは違って「概念」として解釈することが容易なためと思われる。

これに対し *this, that* 等の指示代名詞はかなり自由に①-④のどれにもなりうる。指示代名詞は人称代名詞と逆に、本来「もの」を受ける代用形



である。しかし、「意味・概念」を具体物として捉え直すことは、具体物を「意味・概念」として捉えることよりは容易なので、this, that は②および④も可能なのであろう。

このように it と this/that の間には違いがあるにもかかわらず、Williams (1977) は「NP に支配された代用形」として一律に扱ってしまうことになる。これでは興味深い言語事実を無視することになる。また、Hankamer and Sag (1976) のように、「深層照応」対「表層照応」あるいは「語用論的制御可能」対「語用論的制御不可能」という二分法的分類をするだけでは不十分であるということも言えよう。

### 3 語用論的確定性

さて、ここで it と照応しやすい「意味・概念」とはどのようなものかを詳しく検討してみたい。結論からいうとそれは「語用論的確定性」をもった概念であると考えられる。安井・中村(1984, p. 175)は、“command (request, advise, ask, etc.) + NP + to infinitive” という構文の場合には do so が用いられ、do it はほとんど使われないことを指摘している。

- (10) 
$$\begin{array}{l} \left. \begin{array}{l} \text{commanded} \\ \text{requested} \\ \text{advised} \\ \text{asked} \end{array} \right\} \text{him to withdraw from the concern,} \\ \text{I} \end{array}$$
- $$\text{and he } \left\{ \begin{array}{l} \text{did so.} \\ \text{? * did it.} \end{array} \right.$$

彼らは p. 183 で、これは「語用論的非確定性」ということが理由であろうと述べている。「依頼」、「命令」、「忠告」その他の発話行為は、まだ存在するに至っていない世界を問題にしており、これは so では受けられるが it で指示することは難しいというのである。

さらに安井・中村は述べていないが, want, like, hate, prefer 等のとる「for NP+to 不定詞補文」についても同様のことが言える。この場合, “want/like/hate+ (for) NP+to infinitive” を do it で置換することができないのみならず, “(for) NP+to infinitive” を it にして, \*I want Bill to come, and Mary wants it, too. とすることも不可能である。これは, 「(for) NP+to 不定詞補文」が「語用論的に非確定」であるためと考えられる。では, 定動詞を含む (finite な) that 節は常に it で受けられるかということも必ずしもそうではない。It で指示できるのは叙実性 (factivity) の高い that 節に限られる。同じ that 節をとる動詞でも叙実的な know と非叙実的な think とでは差がある。

(11) a. Many people say Bill is a genius, and I think  $\left\{ \begin{array}{c} *it \\ so \end{array} \right\}$ , too.

b. John got married yesterday, and Mary knows  $\left\{ \begin{array}{c} it \\ *so \end{array} \right\}$

また, believe という動詞は it, so のいずれも可能だが, この場合も次のような分布の違いがある。

(12) a. A : They believe that the earth is round.

B : We believe  $\left\{ \begin{array}{c} it \\ so \end{array} \right\}$ , too.

b. A : They believe that John will be able to come tomorrow.

B : We believe  $\left\{ \begin{array}{c} ?it \\ so \end{array} \right\}$ , too

a のような叙実性の高い that 節は it で照応可能だが, b のように believe という動詞の意味が think に近いような場合には it による照応は困難になる。

要するに, it と照応する「意味・概念」は, 存在が確定している世界に関するものでなくてはならない。これはいわば「叙実的な定動詞を含む節」に対応するものである。したがって it は不定詞補文, 仮定法の that 節,

定動詞を含んでいても非叙実的な *that* 節などは指示しない。

ここで, *it*, *this/that*, *so* 等が *do* に続く形式について考えてみたい。  
安井・中村 (1984, p. 194) は, *do this* や *do that* は *do it* より動詞が総称的 (generic) な意味環境に置かれている場合に現われやすいと述べている。  
次の例を参照。

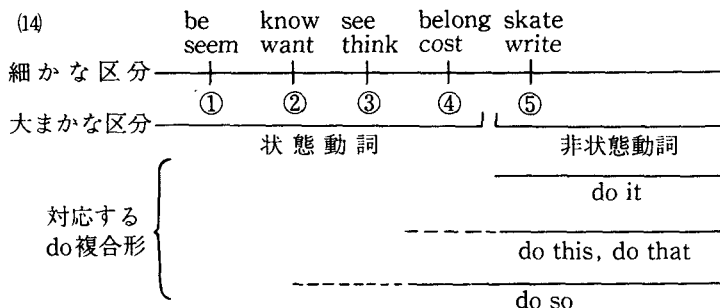
- (13) Our job in this world is to live in an integrated way as value seekers. Prejudgements stemming from these values enable us

$$\text{to } \left\{ \begin{array}{l} * \text{do it.} \\ \text{do this.} \\ \text{do so.} \end{array} \right\} \quad (\text{Crymes 1968})$$

上で *it* が非文法的なのは, *it* が *this/that* や *so* による照応と違って特定の (specific) な事柄を指すためと考えられ, *it* が受けるのは語用論的確定性をもった概念であるという仮説と一致する。さらに安井・中村 (p. 196) は, *do it* が「行為の成就」を強く含意すると述べているが, これもこの仮説と関係がある。行為が成就するということはすなわちその行為によって起こる出来事が存在が確定するということだからである。

#### 4 Do 代用形の検討

この節では *do* 代用形すなわち *do so*, *do this/that*, *do it* に限って性質を見ていきたい。安井・中村 (1984, §6.5) は Quirk *et al.* (1972) 等を引用しながら 3 つの *do* 代用形を詳細に比較・検討し, *do so* > *do this/that* > *do it* の順で使用できる範囲が狭くなっていくことを述べている。安井・中村および Quirk *et al.* によると, *do so* は状態動詞とも比較的照応しやすい。*Do so* が照応できないのは *be*, *seem* の類と *feel*, および *want*, *love*, *like*, *hate* 等の心的状態動詞だけだという (cf. Quirk *et al.*, p. 691)。そして *do it* は非状態動詞としか照応できず, しかも主語が動作主 (agent) でなければならないという。安井・中村は次のようにまとめている。



さて、安井・中村は状態性 (stativity) の概念しか考慮していないが、私見では自制可能性 (self-controllability) も関係あると思われるのでここで考えてみたい。

まず、do it について考える。安井・中村 (1984, p.195) は do it で受けられるのは動作動詞だけで、それも主語が動作主の場合でなければならぬとして次の例をあげている。

- (15) A : When you chop off a chicken's head and it's already dead, it still kicks a few times.

B : Why does it {  $\left. \begin{array}{l} *do\ it \\ do\ that \\ do\ so \end{array} \right\} ?$

- (16) A : When you chop off a chicken's head and it's already dead, it still kicks a few times.

B : I wonder how it does it. (Quirk et al. 1972, p. 693)

安井・中村は、上の(15)で do it が使えないのはニワトリがすでに死んでいて動作主たりえないからであり、(16)で使えるのは I wonder how.....等の構文が、通常の現実世界における場合とは異なって、補文の主語に動作主性を与えられるからだとしている。

このようなことは、状態性のみでなく、自制可能性を考慮に入れば自然に説明できると思われる。この2つの素性を用いて動詞は概略次の4つ

に分類できる。

- (17) (a) [-stative, +controllable] : speak, eat, kick, write, etc.  
 (b) [-stative, -controllable] : die, precede, follow, etc.  
 (c) [+stative, +controllable] : love, hate, believe, feel, etc.  
 (d) [+stative, -controllable] : weigh, cost, resemble, etc.

Do it で受けられるのは(a)の [-stative, +controllable] の動詞だけであると思われる。同じ [-stative] でも (b)の類は do it で照応できない。

- (18) A snowstorm followed the battle, and a great earthquake

$\left\{ \begin{array}{l} * \text{ did it } \\ \text{ did so } \end{array} \right\}, \text{ too.}$

先の(15)の例においても、kick は本来的には(a)に含まれる動詞であるが、ニワトリが死んでしまっているような場合にはそれは動作主でない。したがって臨時的に kick が(b)の動詞とみなされ、do it の照応が不可能になる。しかし(16)のような I wonder how.....等の環境に現われるときには(a)とみなすことが可能になるのである。

では do this/that と do so はなぜ do it より使用できる範囲が広いのだろうか。Do it が [-stative, +controllable] の動詞としか照応しないのは、do という動詞自体が本来は [-stative, +controllable] であるためと考えられるが、では do this/that と do so がこの点で do it と異なる(特に do so はかなり広く使える)のはなぜだろうか。

まず、do this/that について考えよう。1つの仮説として、do this/that が do it より使用可能範囲が広いことは、2節で述べたことの反映であるということが考えられる。つまり、人称代名詞 it が(6)の①②④には使えるが③では不自然であるのに対し、指示代名詞 this/that はかなり自由で①-④のどれも可能である、という事実と関係があるということである。しかし、(14)の表でわかるとおり、do this/that と do it の差異は微妙であり、話者によってはあまり判断に差がない。従って、上記の仮説が妥当だとしても、this/that と it との差よりも do という動詞が共通であることのほう

が優先すると考えてよいだろう。

一方, do so が状態動詞にまで使えるのは, do it と違って do so の結び付きが強くほとんど一語のようになっており (安井・中村, p. 165), do 本来の [-stative, +controllable] の性質が弱まっているためであると考えられる<sup>5)</sup>。つまり do it > do this/that > do so の順で次第に Halliday and Hasan (1976, p. 113) のいう verbal substitute do (do のみによる代用) に近くなるのである。この do は, be 動詞以外ほとんど例外なく代示できる。下の例から, (14)の図でもっとも左端にある seem でも do のみによる代用は可能なことがわかる。

- (19) She seems happier now than she did last time we met.

## 5 結 論

2 節では次のことを述べた。Hankamer and Sag (1976) の, 「深層照応か表層照応か」「語用論的制御可能か不可能か」のような二分法的分類, および Williams の「NP に支配されているか否か」といった条件だけでは言語事実の説明に不十分であり, 「テキスト内か外界か」および「具体的なものか意味・概念か」という2つの基準を考えあわせて照応関係を詳しく検討すべきである。この節では新しい体系図(6)を提案した。

3 節では it の指しうる「意味・概念」が「語用論的確定性」に関係があるということを論じた。

4 節では do it 等の分布についての安井・中村 (1984) の分析を検討し, 状態性だけでなく, 自制可能性が説明に有効であることを見た。

### 注

- 1) 語用論的制御を許す(ように見える)表層照応については, Schachter (1977), Hankamer (1978), 今西・浅野 (1990, pp. 26-28) 参照。
- 2) 最近の生成文法で仮定されている DP 分析 (Abney (1987) 等参照) についてはここでは考えない。

- 3) この場合は①に近いとも考えられる。
- 4) この場合 did it が forgot his keys を受けるという説明があるかもしれないが、主語が Mary の場合は forgot her keys となるべきだからテキスト内の形式そのままを受けるわけではない。
- 5) do so による代示のできない動詞は, be, seem 類以外では [+stative, +controllable] のものであるとすれば記述はできるが, believe はこの代示ができないので反例となってしまう。

### 参考文献

- Abney, S. P. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.
- Crymes, R. (1968) *Some Systems of Correlations in Modern American English*, Mouton, The Hague.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan (1976) *Cohesion in English*, Longman, London.
- Hankamer, J. and I. Sag (1976) "Deep and Surface Anaphora," *Linguistic Inquiry* 7, 391-428.
- Hankamer, J. (1978) "On the Nontransformational Derivation of Some Null VP Anaphors," *Linguistic Inquiry* 9, 66-74.
- 今西典子・浅野一郎 (1990) 『照応と削除』(新英文法選書 第11巻) 大修館。
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Schachter, P. (1977) "Does she, or doesn't she?" *Linguistic Inquiry* 8, 763-767.
- Williams, E. (1977) "On 'Deep and Surface Anaphora'," *Linguistic Inquiry* 8, 692-696.
- 安井稔・中村順良 (1984) 『代用表現』(現代の英文法 第10巻) 研究社。